

陰部外下疳の一症例

金沢大学医学部放射線医学教室(主任 平松博教授)

専攻生 高桑徳勇

(昭和31年12月11日受付)

A Case of Extragenital Chancere

Tokuyū Takakuwa

Department of Radiology, School of medicine, Kanazawa University

(Director : Prof. Dr. Hiroshi Hiramatsu)

内容抄録

感染の機会明瞭な左口角に生じた初期硬結の1例について報告した。

目次

第1章 緒言
第2章 症例
第3章 考察

第4章 結論
主要文献

第1章 緒言

梅毒の感染は皮膚又は粘膜の損傷部より入り、健全な皮膚及び粘膜よりスペロヘータは侵入しない。後天性の梅毒は主として人より人に直接伝染するものである。第Ⅲ期ゴム腫も亦伝染源となることがあるが、最も伝染力のあるものは、第Ⅰ期及び第Ⅱ期の疾患部である。物体に伝染物質が附着して感染を起すことは比較的稀である。伝染は不潔交接によることが最も多く、従つて陰部或いはその附近より感染することが最

も多い。通常梅毒性初期硬結は発生部位によりて陰部初期硬結 (Genitaler Primäraffekt) と陰部外初期硬結 (Extragenitaler Primäraffekt) と遠隔部初期硬結 (Paragenitaler Primäraffekt) とに区別し、この遠隔部初期硬結を狭義の陰部外初期硬結と称せられる。

余は陰部外初期硬結の1例を経験したのでここに報告する。

第2章 症例

患者： T. M. 24歳男，海軍上等主計兵。
主訴： 左口角の潰瘍，左顎下部腫脹。
家族歴： 特記すべきことがない。
既往歴： 特記すべきことがない。
現病歴： 昭和19年3月2日遊興感染の機会あり同月7日左口角に水泡を生じ急激に潰瘍化し10日に至り左顎下部腫脹し漸時増悪するにより同月12日受診す。
現症： 体格大，栄養優良にして体温 36.2 度脈搏 68至，瞳孔左右共正円，対光反射正常，舌薄き白苔を

衣し，咽頭粘膜正常，胸腹部著変なし，左口角に五錢白銅大辺縁稍々膨隆した噴火口状の潰瘍を認め，軟骨様に硬く浸潤を有し，潰瘍面は殆んど平坦にして微量の淡黄色汚穢なる分泌液にて覆われ，自発痛，圧痛等なし。更に左下顎下部より稍々側頸部に亘り小児拳大に腫脹し，発赤，肌熱充進等は認めない。当該部に鳩卵大及び鶏卵大の2箇のリンパ腺を触知し，そのリンパ腺は移動性容易にして僅かに圧痛を認めた。

而して爾来リパノール湿布貼用し，ズルファ剤投与

するも潰瘍及び顎下淋巴腺依然として好転せず 3 月 20 日以下の諸検査を行った。

血液梅毒反応 ワ氏反応 (+)
井出氏反応 (H)
村田氏反応 (H)

尿所見, 糖 (-) 蛋白 (-) ウロビリノーゲン (+)
ウロビリリン (+) ギアッソ反応 (-)
インヂカン (-)
沈渣 膿球 (+) 赤血球 (+)
扁平上皮細胞 (+)

血液所見, 赤血球 520 万, 白血球 6100,
好中球 64% (桿状核 7, 分葉核 57), 淋球 32%,
単球 2%, エオジン 2%, 赤血球沈降速度 1 時間値
65mm, 2 時間値 93mm.

経過: 以上の諸検査成績より左口角初期硬結と診断し「純ネオタンバルサン 2 号」1 週 1 回, 「ギフロ
ン」1 瓦 1 週 2 回投与し, 前者 1.2 瓦, 後者 5 瓦にて
潰瘍は全く治癒し癬痕を止め, 顎下淋巴腺腫脹も消退
した。

第 3 章 考 察

梅毒感染様式について Teanselme は次の 3 型に区別している。

- 1) Origine venerienne 性行為性 (正常及び異常性交)
 - 2) Origine accidentelle 災厄性 (清浄接吻, 授乳, 器械, 器具及び楽器によるもの)
 - 3) Origine professionnelle 職業性 (医師, 解剖者及び産婆)
- の 3 である。著者の報告は明らかに性行為性に感染した陰部外下疳の 1 例である。

Bulkley は 1894 年陰部外硬性下疳について欧米諸国の文献より 9058 例を報告し, その後 Müncheimer は更に 1896 年に至る症例を追加し, Scheuer は 1896 年より 1909 年迄に 5679 例を報告した。この外 1897 年 Fournier は 1124 例を報告した。以上 4 氏の症例を合算すれば実に総計 17068 例である。而して Bulkley 及び Müncheimer 両氏はそれらの発生部位について次の如く分類している。即ち口脣 2285 例, 胸部並びに乳房 1283 例, 口腔内 751 例, 手及び指 522 例, 扁桃腺 504 例, 眼瞼及び結膜 463 例, 咽頭腔及び耳腔 290 例, 舌 175 例, 頤部 166 例, 頬部 161 例, 鼻 125

例, 軀幹 124 例, 肛門 109 例, 下肢 92 例, 陰部附近 80 例, 前膊 60 例, 齒齦 57 例, 頸部 51 例, 前額及び顳額部 50 例, 耳 30 例なり。

本邦においては宮崎は明治 31 年より 44 年迄の全国症例 77 例 (下疳数 78 箇) を報告し, 佐藤は明治 39 年より大正 10 年九大皮膚科教室における 18 例を報告し, 又斎藤氏は昭和 10 年以上 2 氏の報告に更にその後発表のものを追加して 196 例について統計的観察をなし, 更に翌年市川は 211 例を蒐集報告している。市川によれば欧米においては陰部外硬性下疳口脣に最も多く 19.9% にして, 扁桃腺これに次ぎ 10.84% を占め, 齒齦, 臀部, 頬部, 指, 舌及び眼瞼これに次ぐ。本邦においては同様に口脣最も多く 36.98% を占め, 乳房次に位し 10.50% なり。次いで肛門部, 扁桃腺, 陰阜, 手指, 舌及び腹部等の順であるという。

而して余の報告例は本邦において比較的稀れな口脣硬性下疳にして, 感染後 6 日目に潰瘍を生じ, 9 日目に淋巴腺腫脹を来たし, 19 日目に血液検査により梅毒反応陽性により診断を確定した陰部外下疳の 1 例である。

第 4 章 結 論

感染経路の明瞭なる陰部外下疳の 1 例について報告した。

主 要 文 献

- 1) 宮崎: 皮尿誌, 11 卷, 1155, (1911).
- 2) 宮崎: 皮尿誌, 12 卷, :946, (1912).
- 3) 佐藤: 皮尿誌, 21 卷, 810, (1922).
- 4) 斎藤: 皮尿誌, 37 卷, 291, (1935).
- 5) 市川: 日本医科大学雑誌. 7 卷, 447, (1936).
- 6) Ehrmann: Handbuch des GeschlechtsKrh Bd II: 959, (1912).
- 7) Chatenever: Ref. Zbl. f. Haut-u. Geschlechtckrh. B 29: 361, (1929).
- 8) San Antonio: Ref. Zbl. f. Haut-u. Geschlechtskrh. B. 29: 555' (1929).
- 9) Dainow, Schweiz: Med. Wschr. 1: 158, (1929).
- 10) Contantinescu: Ref. Zbl. f. Haut-u. Geschlechtskrh. Bd. 35: 688, (1931).
- 11) Frühwald: Ref. Zbl. f. Haut-u. Geschlechtskrh. Bd. 45: 294, (1933).

高 桑 論 文 附 図

